

平成30年度 入学試験問題（1月専願）

国 語

受験上の注意

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入下さい。
3. 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入下さい。
4. 問題は1ページから12ページまであります。
5. 試験時間は50分です。

開志国際高等学校

一

次の①～⑤は《 》内を漢字に直し、⑥～⑩は《 》内の漢字の読みをひらがなで書きなさい。なお④については、送り仮名も含めて答えること。

- ① 社会への《えいきょう》を考える。
- ② 先生の説明に《なっとく》した。
- ③ 彼は《きよくたん》な考えの持ち主だ。
- ④ 自分自身の考えを《つらぬく》ことに決めた。
- ⑤ 《よだん》を許さない事態になる。
- ⑥ ルールを破った友人に反省を《促》す。
- ⑦ これは《重宝》な道具だね。
- ⑧ 子供たちの《健》やかな成長を析る。
- ⑨ ゲームについての知識を《披露》する。
- ⑩ かねてからの願いが《成就》した。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

つぎの日も暑い一日だった。七月中の温度計がこわれたような気温ではないけれど、朝の九時すぎには真夏日になった。(1) ぼくたちは昼ごはんをたべると、すぐに佃公園に集合した。清澄通り沿いのコンビニで、おにぎりや冷麺、アイスクリームやチョコレート、それに大人用の雑誌やのみのなどを大量に買いこみ、さびれた工場にむかう。なにせ、軍資金はいくらでもあるのだ。

(2) アカサカさんは山盛りのポリ袋三つを見て、目だけで笑った。

「そんなにたくさんもらつても、^アムダになるだけだ。きみたちでかたづけしてくれよ」

実際に口にしたのは、ペットボトルのスポーツドリンクだけだった。昼ごはんのあとだったが、ぼくたちは腹が減っていた。中学生はいつだって腹は減っているのだ。清掃車が都のゴミ袋のみこむように食料をたいらげていく。こんなときはダイの出番だった。ツナマヨネーズのおにぎりをほおばりながらコーラをのみ、キムチ冷麺と抹茶のハーゲンダッツを交互に口に放りこむ。ダイのまえにはたちまちラップと空容器の山ができた。アカサカさんはぼくたちがたべるのをたのしそうに見ていた。誰かががつとものをたべるのを見るのがたのしいなんて、おかしな話だ。ちよつと痛みどめが効きすぎているのかもしれない。

一時間半ほどしてぼくたちが帰ろうとすると、(3) アカサカさんは^{がぜん}慥然とした顔でいった。

「すまないが、誰かそのうえにある袋を、捨ててくれないか。どこか、公園のゴミ箱にでも」

「わかりました」

ナオトが真つ先に動いた。踊り場を数段のぼつたところにおいてあるポリ袋をとりに行く。新聞紙にくるまれたちいさなメロンほどの固まりがいくつもはいつていた。ナオトが戻ってくると、かすかに夏の公衆便所のおいがした。

「悪いな。きみには特別にごほうびをやらなくちゃいけない」

ナオトは恥ずかしげに笑った。

「いいえ。お金はいいです。ぼくもよく入院するので、トイレはどうしてるのかなって心配してました。それより身体の調子はどうですか」

「そちらは悪くない。なにもたべていないから、だんだん軽くなってきた。もうしばらくしたら、ふわふわと風に流されて……」

アカサカさんは踊り場の手すりのむこうに広がる空を視線で示した。

「……あの空に浮かんでいくような気がするな」

そういつてかすかに笑って見せた。オゾン層がこわれて紫外線が多くなったせいだろうか、それとも亜熱帯みたいな気候のせいか、このごろの東京の夏空は南のリゾートのCFみたいなまざりけのない青さだ。ぼくはアカサカさんを見て、空を見た。なぜか、⁽⁴⁾空の青さに涙がにじんで困った。①、ぼくよりもナオトの反応はもっとストレートだった。黒い長袖Tシャツの胸に見る間に点々と涙を落としていう。

「そんなこといわないで、もつと……」

続きの言葉はぼくにもわかった。もつともつと、生きてください。そんなことをいつてもどうにもならないことは、すぐにナオトにもわかったようだった。

「もつと……なにか必要なものはありませんか。なんでもいいです。なんでも用意しますから」

アカサカさんは首を起すのに疲れてしまったようだ。スチロールに頭を落としていった。

「ありがとう。だが、もうほしいものはなにもなくなってしまった」

ダイがタオルでごしごしと顔をこすっていた。ジュンはメガネのしたで濡れたまつげを伏せている。紙オムツでいっぱいのポリ袋を戦利品のようにかかげるナオトを先頭に、ぼくたちは非常階段をおりていった。

大華火祭の日は朝目を覚ましたときから特別な気分だった。ぼくは遠足の朝でもしないことをしてしまった。七階にある部屋の窓から、隅田川のむこう銀座のビルのをうえに広がる空模様を確かめたのだ。わずかに濁ってちいさな雲をあちこちに浮かべた空だった。夏の朝はきれいに晴れていると、午後から天気が崩れることが多い。この天気なら、間違いなく正午には、大華火にふさわしい快晴になるだろう。

プールの時間が無い土曜日の一日、ぼくはなんだかそわそわと落ち着きなくすごした。一年間待っていた華火をたのしみに思う気もちと、アカサカさんの身体への心配がまぜこぜになって、心が一点にとどまっていけないのだ。

江戸時代の航路灯を復元した佃公園のモニュメントのしたで、ぼくたち四人が集まったのは昼のように明るい午後五時だった。月島駅の周辺は浴衣姿の女の子たちであふれ、佃大橋のうえでは早くも^イ渋滞が始まっていた。町全体の様子がざわざわとにぎやかに弾んでいるようだった。ダイとジュンとぼくの三人は自転車先のをそろえて、隅田川の河口のほうを見ていた。川なんていうと静かに思えるだろうけど、東京の川はちよつと違う。普段でも十分に一回はエンジンの音をたてて船がいきかっているの、けつこううるさいのだ。華火大会のその日はプレジャーボートと屋形船で、水上でも交通整理が必要なほどだった。

遅れてきたナオトがぼくたちのうしろから声をかけてきた。

「お待たせ。でかけるまえに決めておこう。アカサカさんのこと、どうする」

ぼくたちはまた別なデザインのつば広帽をかぶったナオトを見た。ジュンがいった。

「今夜はいっしょに華火をたのしんでもらおう。夜中騒がしくて救急車も忙しそうだから、明日の朝一番にどこかの公衆電話から、ぼくが
一一九番に通報する。それでいいだろ」

ダイがいった。

「あ、あのポスターの家族には連絡しないんだ？」

「ああ、なんだかアカサカさんが嫌っている様子をきくと、直接話したくないよ。謝礼はもういいだろ」

ダイがうなずいていった。

「よっしゃ、わかった。そうと決まったら、せいぜいたのしきいこうぜ。一年に一回の大華火祭なんだ。暗い顔してたら、アカサカのおっさん
にも悪いよ。なあ、ナオト、盛りあがっていいこう。笑顔つくれよ、華火がしけちまうぞ」

それでナオトは目をごしごしとこすって、泣き笑いの表情になった。

ぼくたちは途中で寄り道をした。⁽⁶⁾ みんなアカサカさんにもらった金をつかい果たしてしまいたい気もちがどこかにあるようだった。早くも
営業を始めた清澄通り沿いの露店で、もぢきれないほどのものを買う。焼きそば、じゃがバター、イカ焼き、お好み焼き、カルメ焼き、りんご
飴、綿飴、かき氷、ラムネにガラナジュース。なかには中古テレビゲームの露店もあった。ジュンは段ボール箱の横にしゃがみこむと、初代セ
ガ・サターン用のクソゲーを一本三百円で山のように買いこんでいた。

前日よりもたくさんの手みやげをもつて踊り場についたとき、すでに時刻は七時ちよつとまえになっていた。踊り場から見る空は暗く、晴海
埠頭公園は突堤から見物客が海にこぼれそうになっている。先頭のダイが声を張った。

「こんばんは。いよいよ待ちに待った東京湾大華火祭が始まるよ。アカサカさん、なにかくいたいたいものない？」

ダイはマツトの手まえにたくさんの駄菓子をならべた。アカサカさんはうれしげな表情だったが、はつきりとした笑顔をつくるのはつらいよ
うだ。ナオトが心配そうにいった。

「だいじょうぶですか」

アカサカさんは踊り場のコンクリートの天井を見たまま、ぼつりといった。

「いよいよだな。あと数日という気がする」

首を横に振り、夏祭りの菓子を見た。

「ほう、懐かしいな。そのカルメ焼きをくれないか。細かく割って」

ナオトはカルメ焼きに飛びつくと、端を砕いてアカサカさんの口に運んだ。アカサカさんは目を閉じて、口のなかで焦げた砂糖のかけらを転がしている。

「甘いものだなあ。こんなに甘いとは、子どものころは気づかなかった。きみはよく入院するというから知っているだろうが……」
そういつてアカサカさんは震えながら上半身を起こした。全身の力を振り絞っているようだった。すぐにナオトが背中を支える。

「最後にひとつ話しておきたい。よくドラマなんかで、最後のときを迎えてじたばたと見苦しいことをするが、あれは間違いだ。わたしはたくさんの病人を見てきたから、よく知っている」

ジュンがアカサカさんをじつと見つめていった。

「もしかして医者だったんですか」

アカサカさんは、今度ははつきりと笑った。

「そうだ。医者の不養生というやつだな。わたしがみとった患者の多くは、自分の死期を悟り、家族友人に感謝の気もちと別れを告げて、立派に旅立っていった。ほとんどは有名でも金もちでもない普通の人だった。わたしは自分にそんなことができるか、よく不安に思ったものだ。それがこんな形で自分の番がまわってきてしまった」

夜空に大輪の花が咲いて、あとから腹に響く音がくる。踊り場の隅まで一瞬明るく浮きあがり、暗やみかもどると地鳴りのようなカンセイが続いた。ほくは華火に背をむけて、アカサカさんを見ていた。つぎつぎとあがる尺玉で、やせ細った顔が色とりどりに照らさされる。

「きみたちに強がりもいってもしかたないが、わたしもなんとかみんなに続けそうだ。なるべく迷惑をかけずに、静かにひとりりで終わりにしたい。最後にきみたちに会えて、こんな豪華な華火も見物できた。感謝している。どうもありがとう」

お礼をいわれることなど、ほくたちはなにもしていなかった。誰かにありがとうといわれて泣いたのは、ほくは初めてだった。きつとジュンやダイやナオトも初めてだったに違いない。ほくたちが涙をぬぐうあいだにも、夜空には光りの華が開いていた。パツと咲いたはなびらが、海風に流され淡い煙になって消えるとき、鮮やかな残像を残していく。その光りが目の裏に咲いているうちに、また新しい華火があがる。東京湾の夜空は、ずっと昼間のような明るさだった。

きっとこの世界も同じことなのだろう。どこかで誰かが消えて、その名残が響いているうちに、新しい人が生まれる。それでにぎやかで、ちよつとばかばかしいこの世界が続いていくのだ。ぼくたち五人は、それから黙って華火を見あげていた。普段はおしゃべりなぼくたちを黙らせる力が、一瞬咲いて消えるものにはあるようだった。

(石田衣良『4TEEN』より)

問一 二重傍線部ア、エのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 空欄 ① に当てはまる語句を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ だが ウ また エ そして

問三 傍線部(1)「ぼくたち」とあるが、この時「ぼく」以外にいるのは誰か、すべて答えなさい。

問四 傍線部(2)「アカサカさん」は今、どういう状況にあると予測されるか。本文全体を読んだうえで、五十字以内で説明しなさい。(句読点なども字数に含む)

問五 傍線部(3)「アカサカさんは無然とした顔でいった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 頼みごとをするので、またほうびをやらなければならないと思ったから。
イ ぼくたちが自分たちだけ食べ散らかして帰っていくことに腹を立てたから。
ウ もっといろいろな話をしていきたいのに、ぼくたちが帰ろうとしたから。
エ 自身のプライドを傷つけるようなことを、自分で言わなければならないから。

問六 傍線部(4)「空の青さに涙がにじんで困った」とあるが、ぼくが具体的にどのような場面を想像したので、「涙がにじん」なのか。物語中の表現を用いて、説明しなさい。

問七 傍線部(5)「あのポスター」とあるが、ポスターにはどんなことが書かれていたのか。説明しなさい。

問八 傍線部(6)「みんなアカサカさんにもらった金をつかい果たしてしまいたい気もちがどこかにあるようだった」とあるが、これを説明した次の文章について、後の問いに答えなさい。

ぼくたちはアカサカさんに初めて会った日に一万円ずつもらっていた。このお金は、必需品を買って持っていくというアルバイト代のほか、誰にも言わないようにするための口止め料でもあった。しかし、ぼくたちはこんな状態のアカサカさんを放っておくわけにはいかなとと考へ、A ことに決めた。そうするのがふさわしいのだろうが、結果的にそれは、アカサカさんをB ことになる。だから、いつまでもそのお金がぼくたちの手元にあれば、アカサカさんをB という気持ちに苦しめられる。そんな苦しさを少しでも和らげるためには、一刻も早く使い果たすしかない。それも、できるだけくだらないものを買ったほうがいいと思っただけであらう。

なお、次の日に行ってみると、アカサカさんは自ら姿を消していた。アカサカさんの気持ちがいちばんわかるC がぼくたちの計画をアカサカさんに告げていたのである。

(一) 空欄Aに当てはまる内容を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

(二) 空欄Bに当てはまる語句を五字以内で答えなさい。

(三) 空欄Cに当てはまる人物名を答えなさい。

二二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

古来権力者は、科学者を新しい武器の開発など、かれらが持つ特別な知識や能力を戦争において発揮させるべく動員してきた。科学者は、あ
る場合にはいやいやながら、またある場合には積極的に軍事協力を行なってきた。とはいえ、二〇世紀に入るまでは、^①科学そのものの営みと
同じく、あくまで個人の自由意志に任せられた参加にすぎなかった。

しかし、科学者が層として存在するようになった二〇世紀になると、科学が国家の重要な機関となり（科学の制度化）、国家が科学の最大の
スポンサーとなったこともあって、国家として科学者を組織的に戦争に動員して（科学の体制化）、特殊な軍事プロジェクトに従事させるよう
になった。科学者もまた戦争に協力することを当然とみなして、積極的に自らを軍に売り込む、というふう^②に軍と学の持ちつ持たれつの関係が
成立したのである。

日本に目を移せば、明治維新によってようやく近代科学を学び始めた日本は富国強兵の旗の下、国家による科学者や技術者の養成と、彼らの
軍事開発への協力を当然としてきた。科学技術は最初から軍国主義体制に奉仕する道を歩んできたのである。ちなみに、明治以来日本では「科
学技術」が常套句（まじょうご）となつてゐる。それはほとんど「科学に裏打ちされた技術」を意味しており、科学は技術に従属するのが当然とされてきた
ことを押さえておく必要がある。科学者の軍事協力は本質的には科学に裏打ちされた技術の開発だから、まさに科学技術の実力を発揮する場と
なつたのである。

^② 第二次世界大戦においては、日本の科学者のほとんどが（まじょうご）唯々（ただひたすら）として国家による動員に従つてきた。彼らは戦争への協力をどう考えたの
だろうか。他方、日本と同様に軍国主義化し、科学者の組織的動員が行なわれたナチス・ドイツでは、愛国心と科学中心主義が科学者の心のよ
りどころとなつた。このような科学者の意識はナチス・ドイツに特殊なことではなく、現在においても形を変えて世界中で見ることができ
る。

科学者は、自然が隠し持つ謎を解き明かすことに無上の喜びを感じる人間であり、その知的活動はきわめて 1 な好奇心に由来する。一
般に科学者は、他の何者かに命令されたり、何かの役に立たせようと考えたり、自分が有名になりたいと望んだり、というよう^①な 2 な
動機とは無縁である。できるなら、ひとり放つておいてもらつて、ひたすら数式や理論を追究したり、実験や観察に明け暮れていたと望んで
いる存在なのである。

(a) 現実には、研究の遂行のためには他人と関係しなくてはならないし、積極的に他人と関わることは実際に研究を進めるのにも役に立つ。それだけでなく、経済的な利益を得たり、自分の研究が広く知られて名誉心や自尊心をくすぐられたりする場合もある。そうならば、これらの利得の方をより大きな魅力と感じ、それをもつばら追求したくなる。実際そのようにして、国や企業の立場を代弁する御用学者になったり、公害企業の肩を持って被害者の主張を否定したりする「科学者」が輩出することになる。国や企業はそのような「科学者」を重用することで、真の問題を隠蔽するのだ。^③ こうして「科学者」は純粹の科学研究の道から外れていくのである。

^④ 科学者が軍事協力に手を染めるようになるのには、これとは少し違った事情もある。その最も強い理由は、戦争時において愛国心に似た心情が喚起されることだろう。国が科学の最大のスポンサーになつていることによって、科学者は国のために尽くすことを義務と心得る気持ちになるからだ。さらに、自分が持つ特殊な知識が戦争に役立つとなれば、ますます積極的に協力しようという気持ちを抱く。国に対し、日頃科学研究をさせてもらつてお礼をするという気持ちが芽生えるのである。

もう一つの理由は、軍事研究が科学を進めると科学者が誤認することである。科学は戦争によつて発展したと言う人すらいる。しかし、軍事研究によつて発展するのは技術であつて、けつして自然の法則を追い求める科学ではない。近年では、ナノテクノロジーのように、科学と技術が急接近して明確な区別がつけにくい分野も多くなつた。しかしながら、軍事研究は軍需品の開発のために行なうものであるから、純然たる技術なのだ。

例を挙げれば、原爆の開発は、原子核物理学の原理がわかつた上での、それを爆発物として実現する技術の開発であつた。ロボット研究は、人工知能の科学と遠隔操作の技術が結びついているが、ドローンなど軍事への応用となる技術開発であることは明らかだろう。科学と技術が接近しているこのような分野では、科学の発見が直ちに新技術の開発として軍事と結びつきやすいのは確かである。

古代ギリシャでは、タールレス（紀元前七世紀生まれ）以来、多数の「自然哲学者」が登場した（便宜的に、彼らも科学者と呼んでおく）。都市国家間の争い、隣国ペルシャ帝国との戦い、後に力をつけてきたローマとの確執など、数多くの戦乱が長く続き、ギリシャの科学者たちも戦争のために協力させられたと思われる。カタパルト（投石器）のような武器が紀元前四〇〇年頃には登場している。

名が知られている科学者で、戦争に協力した最初の間人はシラクサのアルキメデス（紀元前二八七頃〜同二二二）だろう。彼は物理学において浮力の原理を発見し、さまざまな幾何図形の面積や球体や錐体の体積を求める公式など、数学に関する研究にも優れた才能を発揮した。また、アルキメデスらせんという曲線を用いた揚水機を発明して技術にも貢献している。紀元前二一五年にシラクサがローマ軍に攻められたとき、ヒ

エロン二世の求めに応じて愛国心から戦争の協力をしたと伝えられている。

伝説によれば、巨石を持ちあげて崖から落としたり、船を持ち上げたりすることができるクレインのような鉄製の鉤爪装置、火薬をしみこませた布玉を速射できる長い射程を持つカタバルト、鏡を何枚も使って巨大な凹面鏡とし、太陽光を集めて敵の船を焼き尽くす兵器などを考案したという（これは伝説らしい）。これらはいずれも、テコの原理、力のモーメント、光の反射の法則を知っていれば考え出せる武器であり、数学・物理学に堪能であったアルキメデスであればこそその発明品といえる。

このように、一般市民が思いつかないような科学の原理あるいは法則についての詳しい知識を利用して、武器の考案をすることこそ科学者に求められたものであった。科学者も始めは素朴に、やがて積極的に武器を考え出し、権力者の求めに応じたり売り込んだりするようになっていったのである。

一四八二年、レオナルド・ダ・ヴィンチはミラノ公ルドヴィーゴに、自らを「戦争技術の達人」として売り込む手紙を送っている。彼が考えていた兵器には、大型の矢や石を発射できる巨大バリスタ、大口径の大砲で重い石を飛ばせる射石砲、連射式の火縄銃などがあった。さらに実際には実現性に乏しくて製作されなかった（できなかつた）のだが、防御板で覆われた戦闘車両（戦車の前身）、機関銃の先駆けとなる連射銃、ヘリコプター、ロケット弾発射機、潜水艦などのアイデアを図に残している。

中世末期には、錬金術師が戦争技術の進歩に寄与した。彼らは非金属から貴金属を生み出すという「賢者の石」を探し求めた。その「研究」の過程で、爆発力の大きい火薬を作り出すようになったからだ。さまざまな「実験」によつて錬金術から化学へ脱皮することができたのだが、そこに火薬に関わる軍事技術が絡んでいたのである。

ルネサンス以後、著名な科学者の軍事研究には枚挙の暇がない。たとえば、三次方程式の解法を発見したタルターリアは、重力がまだ発見されていない時代にもかかわらず、落下物は放物線を描くとする弾道学の理論を明らかにして、大砲の命中率を上げることに貢献した。望遠鏡で最初に宇宙を観察したガリレオは、その望遠鏡を敵艦を発見するための道具として軍に売り込んでいる。望遠鏡は軍用品としても役立つことを力説したのである。

注1 常套句……いつも決まって使う文句。きまり文句。

注4 ドローン……遠くからの操縦が可能な無人航空機。

注2 唯々諾々……人の意見に言われるままに従うさま。

注5 力のモーメント……物体に回転を生じさせるような力の性質。

注3 隠蔽……目につかないよう、おおいかくすこと。

注6 堪能……深くその道に達して上手なこと。

問一 傍線部①「科学そのものの営み」とあるが、それは具体的にはどのようなことか。本文中から十六字で抜き出しなさい。(句読点なども字数に含む)

問二 傍線部②「第二次世界大戦においては、日本の科学者のほとんどが唯々諾々として国家による動員に従ってきた」とあるが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 明治維新以来、富国強兵政策の下で、科学者が積極的に自らを軍に売り込み軍と学との協力関係が成立していたから。
- イ 明治維新以来、富国強兵政策の下で、科学者も純粋な愛国心から国と軍に協力するのが当然だと考えられていたから。
- ウ 明治維新以来、富国強兵政策の下で、国家による科学者や技術者の養成と軍事開発への協力が当然とされてきたから。
- エ 明治維新以来、富国強兵政策の下で、科学者は軍事研究においてこそ科学技術の実力を発揮できると考えてきたから。

問三 空欄（ a ）に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア たとえば
- イ だから
- ウ あるいは
- エ しかし

問四 空欄 1、2 に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ選び記号で答えなさい。

- ア 内的
- イ 外的
- ウ 積極的
- エ 消極的
- オ 集団的
- カ 個人的

問五 傍線部③「こうして『科学者』は純粹の科学研究の道から外れていく」とあるが、それはどのようなことか。「自然」「利得」という言葉を必ず用いて、五十字以内で説明しなさい。(句読点なども字数に含む)

問六 傍線部④「科学者が軍事協力に手を染めるようになる」とあるが、その理由として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 軍事研究が科学の発展につながることは否定できないため、戦争や軍事開発を利用して研究資金を集めようと努力したから。
- イ 国が科学の最大のスポンサーであるため、戦争に際しては、科学者がお礼の気持ちから国のために尽くすべきだと思うから。
- ウ 国が戦争に負けることは、愛国心が許さないため、自分たちが持つ特殊な知識を戦争の役に立てたいと考えていたから。
- エ 国や企業に協力することが、すでに科学者の大勢を占めていたため、軍事研究に対する抵抗感がなくなっていたから。

問七 傍線部⑤「科学者の軍事研究」とあるが、それは具体的にどのようなものか。本文中から五十一字で抜き出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。(句読点なども字数に含む)

問八 次の各選択肢について、本文の内容と合うものには○を、合わないものには×をそれぞれ記しなさい。

- ア 今日に至るまで、科学者はあくまで自由意志によって軍事研究に協力してきたと言える。
- イ 日本の科学者もナチス・ドイツの科学者同様、愛国心と科学中心主義から戦争に協力した。
- ウ 科学者は元来、自然を研究するため、数式や理論、実験や観察に没頭したいと思っている。
- エ たとえ批判はあっても、やはり軍事研究によって科学が進歩したと評価することができる。

問九 「科学と軍事」というテーマで、君の意見を自由に述べなさい。必ず具体例を挙げて論じること。その際、本文中の具体例を用いて構わない。(二百字以内、原稿用紙の使い方に従うこと。)